

---

---

## 《論 文》

# バリアフリー委員会の実践にみる 障がい学生支援の取り組みの成果と課題（3） —バリアフリー委員会（BFC）の学生に対する アンケート調査（2010年度実施）をもとに—

新 國 三 千 代 ・ 舛 田 弘 子

---

### 要 旨

本論文の目的は、バリアフリー委員会（BFC）に参加する学生たちへのアンケート結果を分析・考察することで、障がい学生支援の活動に関する彼らの期待度や満足度等を明らかにし、大学と学生との協働のあり方を検討することである。アンケートは2011年2月に実施し、BFC参加学生32名から回答を得た。その結果、1）多くの学生が1年前期に先輩・友人からの紹介やガイダンスをきっかけにBFCに参加していること、2）1年生は主に活動自体に楽しさを感じ、3年生以上は苦勞を伴う達成感や責任感を通じた活動の楽しさを感じていること、3）多くの学生が障がい学生や支援学生との交流を求めて参加しているが、達成度や満足度は低く、その理由を自身の意欲・努力に帰する傾向にあること、4）BFCの目標の達成度に対する評価は、高学年ほど低い傾向があることなどが明らかにされた。これらを踏まえて、教職員が活動に適切な介入・助言を行うこと、大学の組織を充実することが協働にとって重要であることを示す。

Key words：バリアフリー委員会（Barrier-Free Committee：BFC）、障がい学生支援、大学と学生との協働

## 1. 本研究の背景と目的

本研究は、2009年度の札幌学院大学「研究促進奨励金」（共同研究）「バリアフリー委員会の8年間の実践にみる障がい学生<sup>1</sup>支援の成果と課題」<sup>2</sup>の一環として実施されたものである。当共同研究ではこれまでに、「バリアフリー委員会の経緯と取り組み」（新國，2010）および「聴覚障がい学生<sup>3</sup>に対する情報保障の実態と課題」（新國・滝沢・松川，2012）を報告している。本稿では、これまでとは視点を変えて、バリアフリー委員会に参加する学生の意識と活動の実態および、特に学生の活動への支援に関する課題について考察する。以下、「バリアフリー委員会」をBFC（Barrier-Free Committeeの略称）と表記する。

BFCが始まったのは、1999年度に聴覚障がい学生が1名入学し、学生による情報保障ボランティア団体が設立され、2001年度にさらに1名聴覚障がい学生が入学したことから、法学部の教職員が教職員や学生（情報保障ボランティア団体）に呼びかけたことがきっかけである。BFCは

設立以来、聴覚障がい学生や肢体不自由学生の支援に関わる様々な取り組みを、教職員と学生で分担しながら協働して行ってきた。新國(2010)で詳しく述べているが、BFCに参加する教職員と支援学生および障がい学生は共に、講習会や勉強会、講演会などを開催しながら、支援者養成や支援技術のスキルアップ、障がい理解・啓発活動などに取り組んできた。これらの取り組みを行う中で、学生たちは支援活動を組織的に行うようになった。この中核にいた学生たちは、いわば大学における障がい学生支援を実施するスタッフ的役割を果たしてきたと言ってよい。

一方、大学側の支援体制に目を向けると、教育の現場では障がい学生への支援者の確保や配置といったすぐにも対応しなければならない切実な問題を抱えていたにも関わらず、障がい学生支援のための正規の委員会はなかなか設置されなかった。しかしBFCが発足すると、大学側はBFCの取り組みを評価し、2002年度からBFCの活動にかかわる予算を付けるようになった。そして、2009年度には、大学としての正規の組織である「障がい学生支援会議」が設置された。この会議は、本学における障がい学生の受け入れや支援についての方針の策定、支援を実施する組織などについて検討する機関で、副学長、教務部長、学生部長、入試部長、就職部長、BFCの教職員などから構成されている。当会議では、支援を実施する組織としてBFCの位置づけについても検討されたが、なかなか議論は進まなかった。このような中で、BFCを担当する窓口の変更や、BFCに参加する教職員が多忙となり学生と関わる時間が少なくなるといった複合的な事情を背景として、BFCをまとめる学生たちから「大学は障がい学生支援を学生に任せて、何もしてくれない」という不満の声が聞かれるようになった。その後、大学側に働きかけた結果、2012年度に障がい学生支援の担当窓口を学習支援室に固定し、担当する職員(兼務)も置かれた<sup>4</sup>。本アンケート調査は、ちょうど大学としての体制整備の過渡期にあたり、同時に学生からの不満も散見された時期に行われている。従って、大学の障がい学生支援における学生との協働のあり方を考察するための重要な情報を提供していると考えられる。

以上のことから、本稿の目的は、上述のアンケート結果を分析・考察することで、障がい学生支援の活動に対する学生たちの期待や満足感、不満点を明らかにし、今後の障がい学生支援活動における学生との協働のあり方を検討することである。以下、2. では、本稿を進める上で必要な「BFCの障がい学生支援」について概観する。続いて、3. の「BFC参加学生に対するアンケート調査」では、アンケートの内容、実施方法、分析結果について述べる。最後に4. の「考察と結論」において、本稿の目的についての総合的な考察、結論、今後の課題について述べる。

## 2. BFCの障がい学生支援

### 2.1 障がい学生在籍状況

本学の障がい学生在籍数は表2.1の通りである。網掛け部分は、3. で取り上げるアンケートに回答した1年生～4年生が在籍した2007年度～2010年度を示している。2007年度～2010年

度は、上下肢機能障がい学生数はそれ以前に比べ半減しているが、聴覚障がい学生は最も多く在籍した時期である。

表2.1 本学の障がい学生在籍状況

年度	障がい内容						合計人数
	上下肢機能障がい			視覚障がい	聴覚障がい	その他	
	車椅子使用	補助具使用	自力歩行				
1999	3	1	1		1【1】		6
2000	4	1			1【1】		6
2001	3	1	2		2【2】		8
2002	4		1		2【2】		7
2003	7		1		1【1】		9
2004	10		2		3【3】		15
2005	10【1】	1	3	1	5【5】	1	21
2006	8	1	2	2	6【6】	5	24
2007	5【1】	2	3	1	11【8】	5	27
2008	2【2】	2【2】	1	1	11【8】	9	26
2009	4【2】	2	3	2	9【7】	6	26
2010	5【4】	1	2	1	8【8】	4	21
2011	6【3】		2	1	7【6】	2	18
2012	6【4】	0	1	1	8【7】	11	27
2013	5【3】	0	0	2	7【6】	15	29

※数字は人数、【 】は支援を利用した学生数を示している。

※本データは保健センターが入学時の申し出や入学後の健康調査回答によって把握した数字である。2012年度以降の「その他」には障がい学生支援担当者が別途把握した学生数も加算している。

## 2.2 BFC活動と組織

BFCの活動は聴覚障がい学生の情報保障（テイク活動）から始まった。授業の情報保障では、ノートテイクやパソコンを用いたPCテイクを行っている（1回の授業に、2名のテイカーを配置）。

その後取り組んだ活動には、次のようなものがある。①BFC全体に関わる活動（年間計画の作成、会議運営など）、②情報保障に関わる活動（聴覚障がい学生が履修する授業のテイク活動、テイカー養成など）、③学生生活支援の活動（車椅子学生の登下校や学内移動の介助など）、④教務的活動（テイカー・介助者・代筆の配置、支援ルールの作成など）、⑤相談に関わる活動（障がい学生の支援ニーズの把握と支援方法の相談など）、⑥理解・啓発活動（講演会などの開催）、⑦広報活動（通信発行、ポスター・パンフレット・ビラ作成制作など）、⑧交流活動（BFCに参加する学生の歓送迎会の開催など）。このように、取り組んでいる活動は多岐にわたる。

授業をはじめとする学内での諸活動は多様であり、その中で障がい学生が必要とする支援もまたさまざまである。これを踏まえて、BFCの教職員と学生がこれらの活動を役割分担して実行する中で、図2.1に示すBFCの学生組織が構成されるようになった。学生リーダーと副リーダー

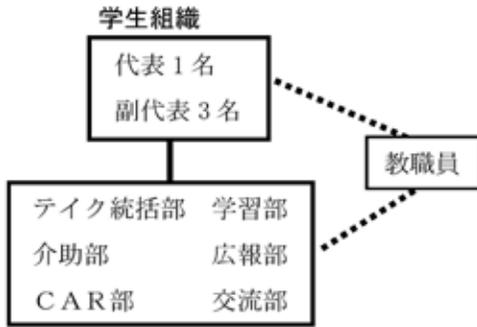


図2.1 BFCの学生組織

表2.2 BFCの各部の活動

テイク統括部	テイク活動の統括, テイカーの配置, テイカー養成テキストの作成, テイク講習会の準備・運営, テイク用機器の管理
介助部	通学及び移動介助, 介助者・代筆の配置, 介助講習会の準備・運営
学習部	障がい理解や相互理解のための学習会, 「みんなでしゃべり場」の企画・運営, 手話勉強会・手話合宿の企画・運営
広報部	通信発行, HP更新, ポスター・パンフレット・活動紹介ビデオ・年間活動報告書等の制作
交流部	障がい学生や支援学生および他大学の学生との交流の企画・運営
CAR部	アルミ缶やリングブルを回収して車椅子と交換

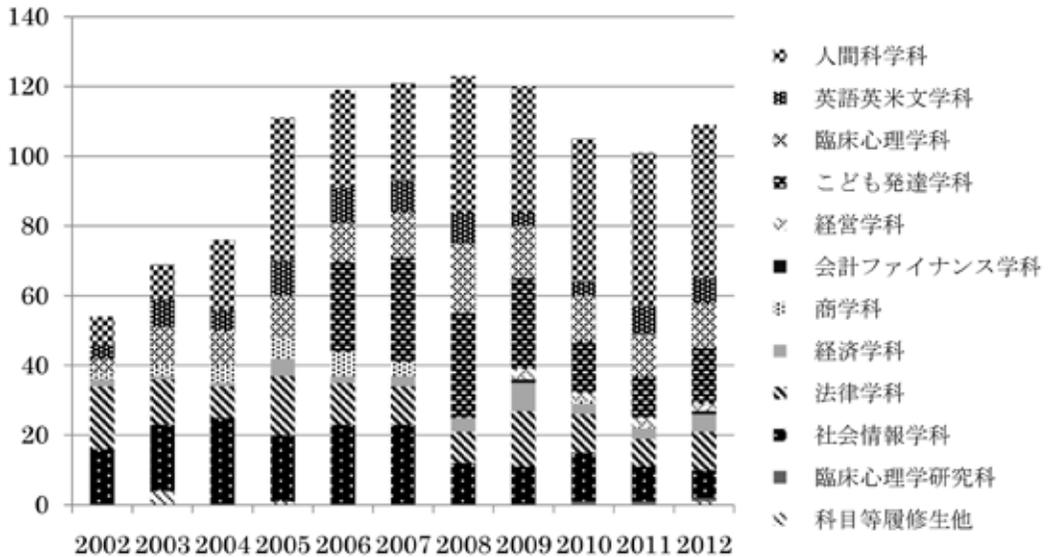


図2.2 学科別に見たBFC参加学生

ーの下に, テイク統括部, 学習部, 広報部, 交流部, CAR部, 介助部からなる6つの部が置かれている(介助部が設けられたのは2007年度からと比較的新しい)。そして, 各部の企画, 運営から実践までを学生達が主体的に担うようになる。教職員はリーダー, 副リーダー, 各部長そしてそれ以外のBFC参加学生達の主体性を生かすべくサポートするようになった。

各部の活動は表2.2の通りである。

BFC参加学生の学科別構成は図2.2の通りである。2005年度以降は, 障がい学生が増えたことに伴い, BFC参加学生数も100名を超えている。様々な学科の学生が参加しているが, 人間科学科やこども発達学科, 臨床心理学科, 法律学科, 社会情報学科の学生の割合が比較的多い。年

度で凹凸があるのは、障がい学生の在籍者数と連動して増減する傾向があるからである。

### 2.3 2007年度～2010年度におけるBFCの障がい学生への支援状況

2007年度～2010年度の障がい学生の支援状況は表2.3「ノートテイク・PCテイク・代筆の支援状況」、表2.4「通学介助の支援状況」の通りである。聴覚障がい学生の授業にテイカーを配置した科目数は前後期合わせると120科目～133科目にもなる。1科目14コマと少なめに見積もっても年間1,680～1,862コマにテイカーを配置していることになる。

2006年度から聴覚障がい学生が増えた（7～8名）のに伴い、図2.2で示した通りBFC参加学生も増えた。特に、アンケートに回答した学生が在籍していた2007年度～2009年度はBFC参加学生数が最も多く、120名にもなる。しかし、支援を行う学生は自分自身が講義を取っていない、いわゆる空き講時にテイクに入るため、テイカーとして活動できる時間帯は限定される。また、テイカーとして活動するためには、ノートテイクやパソコンテイクの技能をある程度習得する必要がある。これらのことから、BFCでは常にテイカー不足に悩まされている。特に新学期は、熟達したテイカーである4年生が卒業するために、テイカー不足はさらに深刻になる。これを解決するには新たな支援技術を開発／見出す必要があるが、それは短時間で解決できる問題ではない。

表2.3 ノートテイク・PCテイク・代筆の支援状況（2007年度～2010年度）

年度	学期	障がいの内容	支援内容	支援利用学生数	支援科目数	支援学生実数 <sup>○</sup>	支援配置学生延べ数 <sup>★</sup>
2007*	前期	聴覚／ 上肢機能	ノートテイクまたは PCテイク、代筆	難聴8 上肢機能1	71	69	195
	後期	聴覚／ 上肢機能	ノートテイクまたは PCテイク、代筆	難聴8 上肢機能1	55	50	145
2008	前期	聴覚	ノートテイクまたは PCテイク	難聴8	65	50	168
	後期	聴覚	ノートテイクまたは PCテイク	難聴8	55	43	141
2009	前期	聴覚	ノートテイクまたは PCテイク	難聴7	61	45	145
		上肢機能	代筆	上肢機能1	12	20	－
	後期	聴覚	ノートテイクまたは PCテイク	難聴7	59	46	148
		上肢機能	代筆	上肢機能3	17	25	－
2010	前期	聴覚	ノートテイクまたは PCテイク	難聴8	73	40	132
		上肢機能	代筆	上肢機能3	8	12	－
	後期	聴覚	ノートテイクまたは PCテイク	難聴7	60	40	112
		上肢機能	代筆	上肢機能4	17	18	－

<sup>○</sup>支援学生実数（テイクには1科目2名、代筆には1科目1名を配置する。同一科目を3名以上で分担して配置する場合もある）

<sup>★</sup>配置学生延べ数（各期で配置された学生の延べ数、一人が複数科目を担当する場合もある）

\*2007年度は、ノート／PCテイクと代筆を合わせたデータになっている。

－はデータが無いことを示している。

表2.4 通学介助の支援状況 (2008年度～2010年度)

年度	学期	利用学生数	回数	支援学生実数
2008	前期	2	不明	25
	後期	2	不明	25
2009	前期	2	21	28
	後期	2	24	26
2010	前期	3	45	32
	後期	4	53	34

※2007年度のデータは不明。

### 3. BFC参加学生に対するアンケート調査

#### 3.1 アンケート調査の構成 (資料1)

アンケート調査は、舩田・工藤 (2009) に基づいて作成された。舩田・工藤 (2009) で用いられた質問紙 (以下、オリジナル質問紙) は、学生の大学地域連携活動 (SGU遊ベンチャー) が発足から4年になり、メンバーも約60名とある程度の大きさの集団が形成されたことを一つのきっかけとして行われたものである。

子どもとのかかわりとそのための企画立案を主な目的とするSGU遊ベンチャーと、障がいを持つ学生と共に学び活動することを目的とするBFCでは、日ごろの活動の目的および内容は質的に異なるといえる。その一方で、学生が自らある程度の大きさの組織を運営して活動を行っていく上で生じる問題や不満には共通のものがあると考えられる。そこで、今回BFCの活動に合わせて項目の改定を行い、また付け加えた項目があるが、それ以外の部分はほぼオリジナル質問紙をそのまま利用した。

主な改定点は以下のとおりである。

- ① 「SGU遊ベンチャー」となっていたところを「バリアフリー委員会」(質問紙ではBFCではなくこの名称を使用) に置き換えた。
- ② 質問項目Ⅲ BFCでは、メンバーは後述するように6つの「部」の一つ以上所属しているのに対し、SGU遊ベンチャーではそのような「部」は存在しない。逆に、BFCにはSGU遊ベンチャーで行っているような定期的な企画はない。従って、オリジナル質問紙の「企画への参加」ではなく、「部への参加」について聞いた。
- ③ 質問項目ⅣおよびⅦ BFCの活動内容 (講義の情報保障のための活動、肢体不自由学生の介助活動、障がいを持つ人との交流など) に合わせて改定した。
- ④ 質問項目Ⅵ オリジナル質問紙の、活動への不満の原因・理由としての「参加している子どもたち」「子どもたちの保護者」は、削除した。

#### 3.2 調査実施の手続き

調査は2011年2月、BFC卒業祝賀会が始まる前に、出席している学生に質問紙を配布して回

答してもらった。回答に要した時間は30分程度であった。

### 3.3 結果

#### 1) 調査協力者の属性

調査協力者の属性は表3.1の通りである。学年、性別とも大きな偏りが無い。ただし、会員数は2011年3月末現在で105名であり、この調査に協力したのはそのうちの3割に過ぎない。また、卒業祝賀会に出席した学生が調査対象になったことから、卒業する4年生、BFCのリーダー、副リーダー、各部の部長など比較的積極的に活動していた学生や支援を利用した学生などが回答している。このことから、本調査はBFC参加学生全体の傾向をとらえたものというよりは、BFCへの関与度の高い学生たちの実態をとらえたものになっているといえる。

#### 2) 調査項目IおよびIIについて

調査項目Iは、「バリアフリー委員会に初めて参加したのはいつ頃ですか？ → あなたが【 】年生の時、【 】月頃」というものであった。これへの回答を表3.2に示す。8割を超える学生が、1年生の4～6月という、大学入学後の比較的早い時期にBFCに参加していることがわかる。

この時期の参加には、参加のきっかけが大きくかかわっていると考えられる。調査項目IIでは、「バリアフリー委員会に参加するきっかけになったのはどういうことですか？ →

1. 募集チラシを見て 2. 教員からの紹介 3. 先輩や友人からの紹介 4. その他」を聞いた。これへの回答は表3.3に示す。最も多いのは「先輩・友人からの紹介」で5割を超える。「その他」の内訳は、「ガイダンスを聞いて」が7名、「家族からの紹介」が1名、「偶然ノートテイキングの様子を見て」が1名、「自分自身障がいを持っているから」が1名であった。ここから、ガイダンスおよび

表3.1 調査協力者の学年と性別

	人数 (%)	性別 (%)
1年生 (2010年度入学)	6 (18.8)	男 4 女 2
2年生 (2009年度入学)	8 (25.0)	男 4 女 4
3年生 (2008年度入学)	8 (25.0)	男 5 女 3
4年生 (2007年度入学)	10 (31.3)	男 4 女 6
合計	32 (100.0)	男 17 (53.1) 女 15 (46.9)

表3.2 初参加の時期

学年・月	人数 (%)
1年・4月	22 (68.8)
1年・5月	5 (15.6)
1年・7月	1 (3.1)
1年・12月	1 (3.1)
2年・4月	2 (6.3)
2年・6月	1 (3.1)
計	32 (100)

表3.3 参加のきっかけ

	人数 (%)
1. 募集チラシ	1 (3.1)
2. 教員から	2 (6.3)
3. 先輩・友人から	17 (53.1)
4. その他	11 (34.4)
2. と 3.	1 (3.1)
計	32 (100)

学生同士の紹介が、BFCへの参加に有効に働いていると考えられる。

3) 調査項目Ⅲ, 所属部と印象的な活動について

BFCは、2. で示した通り、テイク統括部、介助部、学習部、広報部、交流部、CAR部の6つの部を下組織として構成されている。

これに関して、調査項目Ⅲでは、「あなたはバリアフリー委員会ではどの部に所属しています(した)か? → 【      】部」として、所属している部を聞いた。これへの回答は表3.4に示す。この結果から、ほとんどの学生は2つ以上の部に所属していて、各部の所属人数に大きな偏りがないことがわかる。これは、回答者に4年生も含めリーダー、副リーダー、部長経験者が比較的多く、複数の部に所属していた学生が多いためであると考えられる。このように、複数の部に所属しつつ活動をしていることで、それぞれお互いの部の活動内容を理解することができる。

そのような知識をベースに、各個人や各部が有機的につながることができていると考えられる。これは、BFCの強みになっているのではないだろうか。

続いて、印象的だった活動について、「今まで経験した部での活動の中で、最も印象に残っているものと、その理由は何ですか? → 【最も印象に残っている活動内容:      】・理由」として聞いた。その結果は表3.5に示す。最も印象に残っているのは「手話合宿」の8名(25%)であった。これに対して、回答がない学生も同程度見受けられた。印象に残った理由としては、「楽しかった・楽しめた」とするもの、「苦労したがやりがい・達成感があった」とするもの、「部長だったから」など、責任のある立場についたこと、「褒められた」などの評価された経験などが挙げられていた。1年生は比較的「楽しかった」という理由が多いが、3年生以上になると、「苦労したがやりがい・達成感があった」、「部長になったから」などの理由が増える。実際、学生たちとのパーソナルコミュニケーションを通じて、「楽しさ」は、「役に立てた」とか「様々な困難や大変なことを乗り越えてきた」という思いであったと理解できる。このことから、1年次に楽しい経験をすることが、BFCを続けるための動機づけとなり、その後企画や責任のある立場を

表3.4 所属している部

所属部・数	人数 (%)	内訳	
1つのみ	9 (28.1)	テイク (テ)	1 (3.1)
		介助 (介)	1 (3.1)
		学習 (学)	1 (3.1)
		広報 (広)	4 (12.5)
		交流 (交)	0
		CAR (C)	2 (6.3)
複数 2つ	12 (37.5)	テ+学	2 (6.3)
		テ+交	2 (6.3)
		介+広	1 (3.1)
		介+交	2 (6.3)
		学+広	1 (3.1)
		学+交	1 (3.1)
		学+C	1 (3.1)
		広+C	2 (6.3)
3つ	4 (12.5)	テ+学+広	1 (3.1)
		テ+学+交	1 (3.1)
		テ+広+交	1 (3.1)
		介+学+交	1 (3.1)
4つ	5 (15.6)	テ+介+広+C	1 (3.1)
		テ+介+学+広	1 (3.1)
		テ+学+広+交	1 (3.1)
		テ+広+交+C	1 (3.1)
		テ+介+学+交	1 (3.1)
6つすべて		1 (3.1)	
参加部なし		1 (3.1)	
計	32 (100)	延べ人数	
		テ	12
		介	8
		学	12
		広	13
		交	12
C	8		

経験することで、ただ楽しむだけではなく、苦勞とその克服とを伴った参加の喜びが得られているのではないだろうか。

表3.5 印象的だった活動とその理由

活動内容	人数 (%)	理由 (数字は学年)
手話合宿 手話関連活動	8 (25.0)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手話合宿の企画、運営 (4)</li> <li>・楽しみながら手話を勉強できる (4)</li> <li>・短期間で手話に付いて学べるし、宿泊もするので交流の良い機会になる (3)</li> <li>・企画することも沢山あり、苦勞したことや楽しかったことが沢山あったから (3)</li> <li>・ホテルの予約、企画準備等、いつもより頭を使った (2)</li> <li>・みんなと親交を深める良い機会になった (1)</li> <li>・良い経験になった (1)</li> <li>・楽しかったから (1)</li> </ul>
広報活動	5 (15.6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しみにしてくれる人からの声がうれしかったから (4)</li> <li>・物が残るので楽しんで活動し、達成感を得られた (4)</li> <li>・部長として頑張った。みんなで楽しく作業した。(3)</li> <li>・楽しみながら頑張れたから (2)</li> <li>・パソコンが好きだから楽しむことが出来た (1)</li> </ul>
交流活動	3 (9.4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の大学の皆さんと手話を通して交流が出来た (3)</li> <li>・部長をしていて運営に携わったから (3)</li> <li>・企画は大変だけれど、楽しかった (2)</li> </ul>
CAR部の活動	2 (6.3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・部長だったので (4)</li> <li>・CAR部の基本的な活動 (3)</li> </ul>
卒業企画	2 (6.3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が作成したムービーを先輩に褒めて貰えた (2)</li> <li>・一生懸命手話を覚えたから (2)</li> </ul>
テイク活動	1 (3.1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんながどうやれば、テイクが上手くなるか考え、日々の活動に繋がるから (4)</li> </ul>
介助活動	1 (3.1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎日よく、車いす学生の介助 (移動) をしていたから (4)</li> </ul>
10周年記念行事	1 (3.1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コメントなし (3)</li> </ul>
無回答	9 (28.1)	
計	32 (100)	

#### 4) 調査項目IVおよびV, VIについて

調査項目IVでは、「あなたとしてはどのようなことを期待して、バリアフリー委員会の活動に参加しています(した)か? (いくつでも○をしてください。一番期待しているものには◎をしてください)」として、14項目について参加者の「期待度」を聞いた。具体的な項目については表3.6および資料1に示す。

また、同じ項目について、Vとして参加者の「達成度」および「満足度」も聞いた。具体的には、「V バリアフリー委員会での活動を通じて、現時点では、あなたはどのようなことが実際にできていると思いますか? また、そのことに満足していますか? ○で囲んでください。→ (十分出来ている・少しは出来ている・出来ていない)・(満足・不満・どちらとも言えない)」という内容である。

これらへの回答のうち、「期待している」、「十分できている」、「満足」と回答した参加者の人数および%を表3.6に示す。

このうち、期待度の割に達成度および満足度が低いのは、「A 講義保障のための活動」、「B

肢体不自由学生の介助活動」, 「C テイクなどのスキルや介助方法の習得」, 「D 多様な学生と交流」, 「L 障がいを持つ人と交流」, 「M 障がいを持つ人について理解する, 知識を得る」の6項目であった。

これらを見ると, 実際に他者(他の学生や障がいを持つ人)と直接的なかかわりを持つことを期待して入ったが, 実際には十分できておらず, 満足していないと認識していることがわかる。それとは対照的に, その他者との直接的なかかわりのために必要である二次的なこと, 例えば教職員や父母との交流, 会議等での意見集約, 事務手続き, 大学での学習などは, 期待度, 達成度や満足度がともに低くなっている。

表3.6 参加者の期待度、達成度、満足度

	期待している	できている	満足
A 講義保障のための活動	15 (46.9)	6 (18.8)	9 (28.1)
B 肢体不自由学生の介助活動	16 (50.0)	6 (18.8)	9 (28.1)
C テイクなどのスキルや介助方法の習得	15 (46.9)	6 (18.8)	7 (21.9)
D 多様な学生と交流	20 (62.5)	9 (28.1)	15 (46.9)
E 学生同士の交流のスキルを得る	14 (43.8)	9 (28.1)	14 (43.8)
F 教職員や父母と交流するスキルを得る	1 ( 3.1)	1 ( 3.1)	4 (12.5)
G イベント等の企画能力を得る	8 (25.0)	6 (18.8)	9 (28.1)
H 会議等での意見の調整や集約の能力を得る	6 (18.8)	4 (12.5)	7 (21.9)
I 大学での学習から得た知識を活かす	5 (15.6)	3 ( 9.4)	9 (28.1)
J 事務手続きについての知識を得る	1 ( 3.1)	4 (12.5)	7 (21.9)
K 大学での学習に役立つ知識・スキル・体験を得る	10 (31.3)	7 (21.9)	9 (28.1)
L 障がいを持つ人と交流	22 (68.8)	11 (34.4)	11 (34.4)
M 障がいを持つ人について理解する, 知識を得る	18 (56.3)	4 (12.5)	8 (25.0)
N BFCが提供する支援(情報保障)を利用する	2 ( 6.3)	3 ( 9.4)	6 (18.8)
N BFCが提供する支援(介助)を利用する	1 ( 3.1)		

これらを踏まえて, 期待度, 達成度, 満足度の3つでクロス集計を行った。A～Nそれぞれの活動において, 最も人数(%)が多かった組み合わせを表3.7に示す。この結果を見ると, 「当該の活動に期待していなくて, 少ししかできていないが, 特に満足でも不満でもない」というパターンが多くを占める。つまり, 期待度の割に達成度, 満足度は「高くはない」が, かといって不満であるかというところというわけでもない, という参加者の状況が浮かび上がる。

さらに, VIでは, Vで挙げられた不満の原因・理由および対策・改善案を参加者がどう考えるかについて聞いた。具体的な質問の内容は, 「VのA～Nの中で「不満」と答えたものに関してお聞きします。あなたは, それが「不満」と感じられることの「原因・理由」は何だと思えますか?

下記の理由別に, 「不満」としたアルファベット記号を【 】に書き入れてください。そして, その「原因・理由」への対策・改善案(どう改善して欲しい・したいか)が考えられれば, 下の空欄に書いてください。」であった。

これに関しては回答が少なく, 回答したのは6名のみであった。その結果は表3.8に示す。

表3.7 参加者の期待度×達成度×満足度のクロス結果の一部

	最も比率が高いセル/人数（%）	
A 講義保障のための活動	期待する・少しはできている・どちらとも	4 (12.5)
B 肢体不自由学生の介助活動	最も期待・少しはできている・どちらとも 期待ない・少しはできている・不満	3 (9.4)
C テイクなどのスキルや介助方法を習得	期待する・少しはできている・どちらとも	7 (21.9)
D 多様な学生と交流	期待する・十分できている・満足	7 (21.9)
E 学生同士の交流のスキルを得る	期待する・十分できている・満足 期待する・少しはできている・どちらとも	4 (12.5)
F 教職員や父母と交流するスキルを得る	期待ない・できていない・どちらとも	13 (40.6)
G イベント等の企画能力を得る	期待ない・少しはできている・どちらとも	8 (25.0)
H 会議等での意見の調整や集約の能力を得る	期待ない・少しはできている・どちらとも	11 (34.4)
I 大学での学習から得た知識を活かす	期待ない・少しはできている・どちらとも	10 (31.3)
J 事務手続きについての知識を得る	期待ない・少しはできている・どちらとも	12 (37.5)
K 大学での学習に役立つ知識・スキル・体験を得る	期待ない・少しはできている・どちらとも	11 (34.4)
L 障がいを持つ人と交流する	期待する・十分できている・満足	7 (21.9)
M 障がいを持つ人について理解する、知識を得る	期待する・少しはできている・どちらとも	7 (21.9)
N BFCが提供する支援（情報保障/介助）を利用する	期待ない・少しはできている・どちらとも 期待ない・できていない・どちらとも	11 (34.4)

表3.8 参加者が考える不満の原因・理由と対策

考えられる原因・理由	不満があると挙げられた項目・人数	対策（→この項目に対して）	
3) 自分自身の取り組み	A 講義保障のための活動	4	・積極的に公の場でコミュニケーションを図る。しかし、皆が纏め役や調整役を経験することは難しいと考 える。→(ADEFHG) ・イベントなどのPRを多 くする→(ABCM) ・自分の積極性が欠けてい た→(ABC) ・なるべく参加出来るよう にする→(参加していない) ・今後の努力でどうとでも なると思う→(DEJLM) ・もっとちゃんと参加する →(全て)
	B 肢体不自由学生の介助活動	3	
	C テイクなどのスキルや介助方法を習得	3	
	D 多様な学生と交流	3	
	E 学生同士の交流のスキルを得る	3	
	M 障がいを持つ人について理解する、知識を得る	3	
	F 教職員や父母と交流するスキルを得る	2	
	G イベント等の企画能力を得る	2	
	J 事務手続きについての知識を得る	2	
	L 障がいを持つ人と交流する	2	
	H 会議等での意見の調整や集約の能力を得る	1	
	I 大学での学習から得た知識を活かす	1	
	K 大学での学習に役立つ知識・スキル・体験を得る	1	
	N BFCが提供する支援（情報保障/介助）を利用する	1	
1) 教職員の支援のあり方	H 会議等での意見の調整や集約の能力を得る	2	大学側と学生がもっと意見を交換する場があったら良いと思う→(FJH)
	F 教職員や父母と交流するスキルを得る	1	
	J 事務手続きについての知識を得る	1	
	M 障がいを持つ人について理解する、知識を得る	1	
2) バリアフリー委員会の組織としての全体的な運営の仕方	回答なし	回答なし	
4) 他の学生メンバーの取り組み	回答なし	回答なし	

全体的に見て、大学からのサポートや、組織や他の学生の問題とするのではなく、自分自身の努力の問題とする傾向があることがわかる。このような、「意欲・努力還元主義」とでもいうべき傾向は、舛田・工藤 (2009) でも観察された。BFCでは当初は教職員と学生が一緒に問題を考えながら解決方法を見いだしてきたが、ある程度方法が確立してくると学生たちの自治的な活動になってきている。このことが、このような反応に影響しているのかもしれない。一方で、活動の可否に関して学生たちが自分自身のあり方を顧みることが確かに重要なことではあるが、これから社会に出て様々な問題状況にぶつかっていくであろう学生たちにとって、問題の原因・理由や解決手段を自分自身のみに見出すことは、決してバランスの取れた考え方とは言えない。むしろこれは、自分で自分を追い詰める可能性があるという点において、危険な考え方であるかもしれないのである。

ところで、学生がこのような活動を行うことに教育的な意味を見出すとすれば、何らかの経験を積む中で、学生の意図を超えて、特定の能力やスキルが身につくことを無視することはできない。そこで、参加者が感じている期待外の効果を知るために、「前ページのVにあげられたA～Nの項目の中で、あなたとしては最初はあまり期待していなかったけれど、結果的に自分のプラスになっていると感じられる内容があれば、そのアルファベット記号を書いてください。」との内容で質問した。その結果は表3.9に示す。これに関しては、13名(40.6%)の参加者が、1つ～全ての項目について、プラスになっていると回答した。その中でも、「H 会議等での意見の調整や集約の能力を得る」、「E 学生同士の交流のスキルを得る」、「D 多様な学生と交流」、「M 障がいを持つ人について理解する、知識を得る」など、主にコミュニケーションを通じた調整能力などに手ごたえを感じていることがうかがわれる。

表3.9 期待してはいなかったがプラスになっている活動内容

活動内容	人数 (%)
H 会議等での意見の調整や集約の能力を得る	6 (18.8)
E 学生同士の交流のスキルを得る	5 (15.6)
D 多様な学生と交流	4 (12.5)
M 障がいを持つ人について理解する、知識を得る	
A 講義保障のための活動	3 (9.4)
B 肢体不自由学生の介助活動	
C テイクなどのスキルや介助方法を習得	
G イベント等の企画能力を得る	
L 障がいを持つ人と交流する	2 (6.3)
F 教職員や父母と交流するスキルを得る	
J 事務手続きについての知識を得る	1 (3.1)
K 大学での学習に役立つ知識・スキル・体験を得る	
N BFCが提供する支援(情報保障/介助)を利用する	0
I 大学での学習から得た知識を活かす	

##### 5) 調査項目Ⅶについて

BFCは、通常の学生サークルとは異なり、「バリア無き大学をめざし、障がいを抱えた学生と共に、様々な問題に取り組み、共に歩む(HPより引用)」ということを目標として掲げ、その実

現を目指している組織である。この目的が参加者から見て達成されているかどうかについて調べるために、調査項目Ⅶでは、「バリアフリー委員会は、10年前に障がいを抱える学生と支援学生そして支援に関わる教職員達が立ち上げた組織です。現場で必要とされる支援方法について、共に学び（①）、共に取り組み（②）ながら、学びの環境を改善していくことを目的としてきました。障がいによって必要な支援が異なるため取り組みが完結することはありませんが、あなたから見て、①と②はバリアフリー委員会の活動の中で達成されていると考えますか？ ○をしてください。→（1.十分達成されている 2.達成されているが不十分 3.達成されていない）」として聞いた。その結果は表3.10に示す。「十分達成されている」と考える参加者は3割程度で、ほとんどの参加者は「不十分」ととらえていることがわかる。この傾向は、2年生以上で顕著である。1年生の7割弱が「十分達成されている」と回答しているが、1年生にとってはすべてが初めての経験なので、新鮮な気持ちで先輩たちに教えられながら「共に学び」、「共に取り組んでいる」と感じているのであろう。これに対して、2年生以上の学生は数年の経験を経て、テイク技術のスキルアップの必要性や障がい学生支援における理解の未熟さを実感したり、BFCで責任のある役割に就くなどして難しい場面に立ち会うことから、この目標の達成については1年生よりは厳しい評価になる傾向にあると考えられる。

表3.10 BFCの目標の達成度についての認知（全体、学年別）

調査項目	選択肢	全体 (%)	1年生 (%)	2年生 (%)	3年生 (%)	4年生 (%)
① 共に学ぶこと	十分達成されている	10 (31.3)	4 (66.7)	1 (12.5)	3 (37.5)	2 (20.0)
	達成されているが不十分	20 (62.5)	2 (33.3)	5 (62.5)	5 (62.5)	8 (80.0)
	達成されていない	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	無回答	2 (6.3)	0 (0)	2 (25.0)	0 (0)	0 (0)
② 共に取り組むこと	十分達成されている	12 (37.1)	4 (66.7)	2 (25.0)	3 (37.5)	3 (30.0)
	達成されているが不十分	17 (53.1)	2 (33.3)	3 (37.5)	5 (62.5)	7 (70.0)
	達成されていない	1 (3.1)	0 (0)	1 (12.5)	0 (0)	0 (0)
	無回答	2 (6.3)	0 (0)	2 (25.0)	0 (0)	0 (0)

#### 4. 考察と結論

3. において、BFCの学生を対象としたアンケート調査（2011年2月実施）に基づき、BFCの障がい学生支援の取り組みの成果と課題について分析した。分析結果をまとめると次のようになる。

- 1) 調査協力者について。BFC参加学生全体の傾向というよりは、BFCで積極的に活動している学生たちの実態をとらえたものである。中核になる学生たちは複数の部に所属して活動した経験を持っており、複数の部で活動しているので、それぞれお互いの活動内容を理解することができ、これらの知識をベースに、各個人や各部が有機的につながることができていると考えられる。
- 2) BFC参加時期ときっかけについて。アンケートに回答した学生の大半が、1年次の早い時期（4月～6月）にBFCに参加している。参加のきっかけは、先輩・友人からの紹介や大学入

学後のガイダンスである。

3) 印象的だった活動とその理由について。1年生は「楽しかった」という理由が多いが、3年生以上になると、「苦労したがやりがい・達成感があった」、「部長になったから」などの理由が増えることから、1年次に楽しい経験をすることが、BFCを続けるための動機づけとなり、その後、企画や責任のある立場を経験することで、苦労を伴った参加の喜びにつながっていると考えられる。

4) BFCへの期待・達成度・満足度について。回答した6割を超える学生が、BFCに参加した当初は、「多様な学生と交流」、「障がいを持つ人と交流」、「障がいを持つ人について理解する、知識を得る」ことを期待したと回答している。その一方で、期待の割には、達成度、満足度は低い傾向にある。また、「講義保障のための活動」、「肢体不自由学生の介助活動」、「テイクなどのスキルや介助方法の習得」についても期待度の割に達成度、満足度が低い。これらについて、「自分が期待している程には十分できておらず、満足していない」と感じていると考えられる。

5) 4)での不満への対策や改善案について。自分自身の意欲や努力の問題ととらえる傾向がある。また、大学側と学生が意見を交換する場を設けることを改善策として挙げているものもある。

6) 当初期待していなかったがプラスになっていると感じる活動について。4割の学生が、BFCの活動が結果として自分にプラスになっていると回答している。その中でも、「会議等での意見の調整や集約の能力を得る」、「学生同士の交流のスキルを得る」、「多様な学生と交流」、「障がいを持つ人について理解する、知識を得る」など、コミュニケーションに関わる活動がプラスになっていると回答している。

7) BFCの目標が達成されているかについて。「十分達成されている」と考える学生は3割程度で、大半が「不十分」ととらえている。特に、1年生の7割弱は「十分達成されている」と回答しているが、2年生以上は否定的な見方をしていることがわかる。

ここで列挙したことは、本学の障がい学生支援において、学生たちの主体性を生かしながら学生との協働を進めていく上で踏まえておくべきことを示唆している。

1) については、学生たちが部にわかれて活動していても、複数の部に所属する経験が共通理解を促進し、BFCの活動を円滑に進めることにつながっていると考えられる。従って、組織の縦割りを避け、学生間の情報の共有とそれぞれの活動の役割や意義についての共通理解を促進するように教職員がサポートすることが大切である。

2) については、新学期当初のガイダンスは支援学生を集める効果的な場となっていることが明らかであるので、今後もこのような機会が活用されるよう、支援していくべきである。

3) については、1年生が無理なくBFCの活動や仲間になじんで責任のある役割を果たし、達成感を感じられるような企画を、教職員も学生とともに考えていくことも大切である。

4) については、多様な学生との交流の場や支援技術の習得の場を設けることが求められているが、同時にこれが達成度や満足度につながるような工夫が必要である。これに関しては、先輩

学生たちの実践や工夫などを、教職員が媒介者となって後輩学生たちに伝えていくことも重要である。

5) については、「意欲・努力還元主義」は一般的によくみられることであり、「大学との意見交換」を求める声は障がい学生支援の実施に関わる学内体制と密接な関係があると考えられる。前者については、教職員が介入し、大学におけるBFCの位置づけの問題、仲間集団の問題などに関連付け、より幅広く問題をとらえ、解決する方法を考えさせるべきである。後者については、BFCの活動を学生たちが自治的に行う良さは当然あるが、教職員が学生と一緒に取り組むこともまた重要であることが示されていると考えられる。定期的に学生との対話の機会を持つことなどが必要である。これらを踏まえると、学生が気軽に相談できるような窓口は、必要不可欠である。

6) で「BFCの活動が結果として自分にプラスになっている」と回答しているのは、支援を利用する学生（障がい学生）と支援に関わる学生が、所属学科を越えて一緒に障がい学生支援に取り組んできた結果であるとも考えられる。このように多様な学生たちが、特定の問題状況を共有して関わり合うことは大学の教育の現場では意外に少ない。学生たちが交流する中でお互いの多様性を理解したり、取り組みの企画や方法を検討する中で高度なコミュニケーション力を培うなど、大学の授業では十分に扱えていない部分をBFCの活動が補完し、結果としてこのような力を身につける場になっていると言ってよいであろう。これらは、BFCのような取り組みの教育的な意義と言える。

7) では、5) で述べたこととも共通するが、教職員の適切な介入がなければ、障がい学生の支援に意欲的な学生たちの動機づけを低下させることにもつながりかねないことが示されている。また、学生たちだけでは解決できない問題に直面したときに、解決できずにやり過ごすという危うさを孕んでいることも認識しておくべきであろう。

最後に今後の課題について述べる。

第一に、大学としての新たな学生に対する支援の取り組みを提案したい。例えば、筆者等が2007年度に3名の教員で開講した教養ゼミナール「障がいの理解と支援方法」(資料2)のように、BFCに参加している障がい学生や支援学生のみならず、他の学生たちも共に学ぶことができるような場を設けることが望ましいと考えられる。そのためには、全学的なゼミナールや講座の検討が求められる。上述のアンケートの結果から、1年次の早い時期にBFCに参加する学生が多いことが明らかであるため、1年次にこのような授業が履修できると、障がいの理解および障がい学生とのかかわりのための基礎的な知識を得る上で効果的であろう。

第二に今回のアンケートに関する改善点について述べたい。

まず、調査協力者の問題がある。今回の調査協力者数はBFC参加学生全体の1/3程度と少なかった。加えて、本文中にも記述したが、比較的熱心に活動していた学生たちの回答に偏っているきらいがあり、集団全体の声をとらえることはできなかった。これは本調査の問題点といえる。しかし、BFC参加学生は様々な学科に所属しているため、同時にアンケート用紙を配布し

て回答してもらうことは事実上難しい。できるだけ多くの学生からデータを集めるためには、メールを活用するなど、実施方法を工夫する必要がある。

そして、調査項目の不備の問題が挙げられる。今回の調査項目は、前述のように、舛田・工藤(2009)を改定したものであるが、改定の際の文言の検討が一部不十分なところがあった。例えば調査ⅣおよびⅤ、Ⅵにおける項目F「教職員や父母と交流するスキルを得る」について、元の研究における対象者であるSGU遊ベンチャーでは、子供と活動する企画の際に、子どもたちのみならず保護者と接する機会も多い。したがって、項目中の「父母」という文言は妥当なものである。しかし、BFCにおいては、障がい学生の保護者とかかわる機会はほとんどない。従って、このような文言を入れることは不必要だけでなく、学生の項目解釈に混乱をきたす可能性もあったと考えられる。むしろ、「学外の障がい者団体や支援団体の関係者」のような、学内の教職員ではない、外部の社会人とかかわりについて聞く必要があったのかもしれない。

第三に、研究の継続性が望まれることについて述べたい。今回のアンケートは、冒頭で述べたように、学内の組織の改編に伴う過渡期における学生の実態について測定したものである。しかし、厳密に言えば、それ以外の時期との比較検討がなければ、今回のデータが本当にその特定の時点の特徴であるか判断することは難しい。そのためには、このようなアンケート調査を毎年継続的に実施し、学生の意識や活動実態の経年的変化を把握する必要があると考えられる。

以上、BFCの経年的な取り組みを概観しつつ、アンケート結果に基づいて考察してきた。ここで明らかになってきた課題を今後念頭に置いて、本学の障がい学生支援の取り組みを行っていくべきであると考えている。

## 付記

本研究は2009年度の札幌学院大学「研究促進奨励金（共同研究）（研究課題番号：SGU-G09-191014-03, 研究課題名：「本学バリアフリー委員会の8年間の実践にみる障がい学生支援の成果と課題」）の一環として行われた。

## 注

- 1 本稿では、「障がいのある学生」を「障がい学生」と表記する。
- 2 新國三千代（こども発達学科）、滝沢広忠（臨床心理学科）、松川敏道・舛田弘子・藤野友紀（人間科学科）、西 真木子（英語英米文学科）、皆川雅章・大國充彦（社会情報学科）による共同研究である。
- 3 本稿では、「聴覚に障がいのある学生」を「聴覚障がい学生」と表記する。以下同様。
- 4 2014年には支援を実施する大学の組織として常設委員会である「アクセシビリティ推進委員会」が設置された。

#### 参考文献

- 舛田弘子・工藤与志文(2009)「大学における「体験型学習」の有効性に関する教育心理学的研究：子どもを対象とした大学地域連携活動(SGU遊ベンチャー)を対象に」, 札幌学院大学人文学会紀要85号T, p.103-121, 2009年3月, 札幌学院大学人文学会。
- 新國三千代(2010),「札幌学院大学バリアフリー委員会の実践にみる障がい学生支援の取り組みの成果と課題（1）－バリアフリー委員会の経緯と取り組みを中心に－」, 札幌学院大学社会情報学部紀要『社会情報』Vol.19, No.2, pp.53-84, 2010年3月。
- 新國三千代・滝沢広忠・松川敏道(2012),「札幌学院大学バリアフリー委員会の実践にみる障がい学生支援の取り組みの成果と課題（2）－聴覚障がい学生に対する情報保障の実態と課題－」, 札幌学院大学社会情報学部紀要『社会情報』Vol.21, No.2, pp.31-67, 2012年3月。
- 札幌学院大学バリアフリー委員会ホームページ <http://bfc.sgu.ac.jp/>





2) バリアフリー委員会の組織としての全体的な運営の仕方が原因・理由と思うのは→

【

↓対策・改善案は？

3) 自分自身の取り組みが原因・理由と思うのは→ 【

↓対策・改善案は？

4) 他の学生メンバーの取り組みが原因・理由と思うのは→ 【

↓対策・改善案は？

5) その他、考えられる原因・理由と、その対策・改善案を自由に書いてください。

Ⅵ 前ページのⅤにあげられたA～Nの項目の中で、あなたとしては最初はあまり期待していなかったけれど、結果的に自分のプラスになっていると感じられる内容があれば、そのアルファベット記号を書いてください。

→ 【

Ⅶ バリアフリー委員会は、10年前に障がいを抱える学生と支援学生そして支援に関わる教職員達が立ち上げた組織です。現場で必要とされる支援方法について、共に学び(①)、共に取り組み(②)ながら、学びの環境を改善していくことを目的としてきました。障がいによって必要な支援が異なるため取り組みが完結することはありませんが、あなたから見て、①と②はバリアフリー委員会の活動の中で達成されていると考えますか？ ○をしてください。

① → (1. 十分達成されている      2. 達成されているが不十分      3. 達成されていない)

③ → (1. 十分達成されている      2. 達成されているが不十分      3. 達成されていない)

## 資料2

### 2007年度全学共通科目「教養ゼミナールA（16）」

講義担当者：新國三千代，松川敏道，新田雅子

#### 1. 授業のねらい

テーマ：障がいの理解と障がい学生への支援

6年前に発足したバリアフリー委員会（BFC）は、学生および教職員有志からなる組織（100名を超える）として障がい学生の修学、学生生活の支援を行ってきている。本活動の特徴は、「学生達が主体的に活動していること、障がいを抱える学生達も一緒に活動していること」にあり、他大学にはみられない特色を発揮しながら充実した活動を続けている。

この講義では、主としてこうしたBFCの活動の紹介と実際に体験してみることを通しながら、障がい学生への支援について学ぶことをねらいとしている。また、障がい学生への支援だけにかぎらず、ゼミナール全体を通して「協働して問題を解決する」ことの意義を考える機会にもしたい。

#### 2. 授業方法

講義と演習からなる。講義では、本学でさまざまな支援を行ってきたBFCの学生達や支援を利用した学生達の講話や学外から講師をお招きした講演会なども企画している。また、実際の支援の方法など、実技を伴った講義も用意している。

演習では、関心のあるテーマ毎にグループを編成し、各テーマに沿った演習を行う。例えば、本学で行われているノートテイクやパソコンテイク等を学ぶグループに対しては講習会を用意し、これらの技術を実践的に学ぶことができるようにする。講習会では、BFCの先輩達がSA（実習補助員）となって受講生の学習を支援する。その他のテーマとして、これまでのバリアフリー活動で提起されたいくつかの課題やゼミに参加する学生達が考えた課題について、グループでその解決方法を検討してまとめる形も認める。いずれの場合も、最後の週にグループ毎に得られた成果を発表し、相互に理解を深める。

なお、本授業は新國三千代（人文こども発達学科）、松川敏道・新田雅子（人文人間科学科）の3名が担当する。

#### 3. 授業内容／計画

- (1) 障がいのある学生とともに学ぶ 本学の取り組みと全国の動向（教員）
- (2) 本学における障がい学生支援の活動（BFCの学生）
- (3) 支援すること／されることのすばらしさ－学生の体験から－（コーディネート：教員）
- (4) 聴覚障がいの理解と支援方法（外部講師による講演会）
- (5) 視覚障がいの理解と支援方法（教員＋当事者）
- (6) 肢体不自由の理解と支援方法（教員＋当事者）
- (7) 支援する／されることを体験する（教員＋BFC学生）
- (8) 障がい者支援の倫理とルール－困難の共有と理解、解決に向けて－（教員＋BFC学生）
- (9) 演習：ノートテイク・PCテイク（SAの支援による講習会）、その他課題解決の取組等
- (10) 演習：ノートテイク・PCテイク（SAの支援による講習会）、その他課題解決の取組等
- (11) 演習：ノートテイク・PCテイク（SAの支援による講習会）、その他課題解決の取組等
- (12) 演習：ノートテイク・PCテイク（SAの支援による講習会）、その他課題解決の取組等

- (13) 演習：ノートテイク・PCテイク (SAの支援による講習会), その他課題解決の取組等
- (14) 成果発表会

#### 4. 成績評価方法

レポートの提出 (40%) および授業態度 (60%) により総合的に評価する。

#### 5. テキスト

適宜プリントを用意する。

#### 6. 参考文献

講義の中で適宜紹介する。

#### 7. 関連ページ

障がい学生支援教養ゼミナール <http://int-web.edu.sgu.ac.jp/~nikku/bf-semi/>

札幌学院大学バリアフリー委員会 <http://www.sgu.ac.jp/bfc/>

日本学生支援機構「障害学生修学支援情報」 [http://www.jasso.go.jp/tokubetsu\\_shien/index.html](http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/index.html)

#### 8. 備考

1～4年生が履修できます。多くの学生が履修しやすいように5講目に設定しています。授業内容は大変興味深いものになっていると思いますので、多くの学生に履修してもらいたいと思います。

障がいについて理解したいと思っている学生や支援をしてみたいと思っている学生、こんな支援が欲しいと思っている学生達も大歓迎いたします。

The Achievements and Problems in the Progress of Barrier-Free Committee (BFC)  
at Sapporo Gakuin University—Based on the Analysis of the Questionnaire Given to  
Student Members of the BFC (3)

NIKKUNI Michiyo and MASUDA Hiroko

Abstract

The aim of this study was to determine how university staff could assist BFC student members in making the program more effective. A questionnaire was given to first, second, third and fourth-year BFC student members to discover their expectations and their degree of satisfaction with their activities in the BFC. The survey was conducted in February 2011, and our questionnaire was answered by 32 students of the BFC. The results are as follows: 1. For many BFC student members, peer or upper-class BFC student members invited them to attend BFC activities in their first semester at the university. 2. In general, first and second-year students simply enjoyed attending the BFC activities. However, third and fourth-year students took more pleasure in the challenge and responsibility of planning BFC activities. Even if the activity was not successful, the upper-class students enjoyed the process of planning the activity and performing the tasks necessary to host it. 3. Many student members participated in BFC activities expecting to interact with disabled students and fellow BFC students. When these goals were not realized, students attributed their dissatisfaction and poor level of achievement to their own lack of motivation and effort. 4. As students advance through the university, their level of achievement in the BFC diminishes. Based on these results, to improve cooperation and the achievements of BFC students, we conclude that the university staff needs to oversee BFC activities by offering advice and giving direction to students to make activities more enjoyable, challenging and rewarding. The university's organizational structure of the BFC needs to be modified to be more effective at serving its BFC students.

Keywords: Barrier-Free Committee, support for disabled students, cooperation of university staff and students

(につくに みちよ 札幌学院大学人文学部教授 こども発達学科)

(ますだ ひろこ 札幌学院大学人文学部教授 人間科学科)